



2012年(平成24年)

5月号(No. 804)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

YOUTH CLUB 誕生が描く 次代の日本山岳会

YOUTH CLUB 委員 永田弘太郎

ことし4月に誕生したYOUTH CLUBは、これまでの青年部委員会、学生部委員会、学生指導委員会を、有機的に統合させたものである。近年の登山ブームに乗って単に若い会員を増やすことなく、これまで日本山岳会が築いてきた登山の歴史と文化、実力と若手のパワーを融合させようという試みであり、日本山岳会の今後に大きく関わる重要な事業である。

■ YOUTH CLUBの発足式

2012年4月1日、YOUTH CLUBが発足し、18日に発足式が行なわれた。39歳以下の若者を中心におよそ50人がプラザエフ(東京・市ヶ谷)の会場に集まった。新しくYOUTH CLUB委員長となった野沢誠司理事の司会のもと、尾上昇会長はいさつの

なかで、いくどとなく「君たちに新しい日本山岳会を作ってほしい」と強くメッセージを述べた。ゲストスピーカーとして、JJヤンボウさんこと横山勝丘さんのフィッツロイ(パタゴニア)の報告があった(来月号詳細掲載予定)。山登りや仲間と過ごす時間の楽しさが伝わってくる話だった。さら

目次

YOUTH CLUB誕生が描く	
次代の日本山岳会……………	1
今夏の海外登山計画 ふたつの未踏峰へ…	5
歴史と伝統に支えられた会報の「力」…	6
歴史と新しさの融合を試みを…	7
支部だより……………	8
北海道支部	
「Japanese Alpine News」第13号発行…	9
図書紹介……………	10
会務報告……………	14
新入会員……………	16
ルーム日誌……………	18
会員異動……………	18
図書受入報告……………	18
INFORMATION ……	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10~20時
水・金……………13~20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10~18時



発足会に集まったメンバー

には、ゲストの平出和也さんと谷口けいさんによる若者たちへのエールもあった。

また、学生部のザンスカール遠征隊の紹介と、飛び入りでこの日参加したインドネシア・カリマンタン島の未踏の大岩壁に挑む隊の

紹介もあった(詳細5ページ参照)。いずれも、The North Face Overseas Expedition Fund(ザ・ノース・フェイス海外エクスペディション支援プログラム)に選ばれたチームであり、このファンドの授賞式が同日に行なわれたばかりだった。

ふたつのチームから、それぞれの遠征について意気込みなどが話された。若者たちの山への熱気があるふれ、当会の新しい時代を感じさせるパーティとなった。

■ YOUTH CLUB発足の背景

YOUTH CLUBという組織は、尾上会長の提案で発足したJAC-YOUTHプロジェクトチームが発展解消したもので、継続的な活動をするために委員会として発足し、再スタートを切った。

そして従来からの青年部委員会、学生部委員会、学生指導委員会を有機的に結合して統括する組織となった。

J A C Y O U T H プロジェクトにはいくつかの目的があった。「若者を育てることを」である。人によつてはここに、「海外遠征に行くこと」「日本山岳会の活性化」「新しい日本山岳会を作ること」などがついていた。

背景には、当会の高齢化による存続の不透明性、大学山岳部の衰退による入会予備軍や指導者の減少、さらには山ガールなどの山ブームがあった。そのため大学山岳部へのサポートやワンダーフォーゲル部などを含めた学生の掘り起こしなどを行なう一方、社会人の若者も集める方向で取り組むことになった。

一般向けに雪山入門教室を立ち上げ（大学山岳部やワンダーフォーゲル部の学生たちも参加）、研修生に日本山岳会への入会を勧めた。またバックカントリースキーヤー・スノーボーダーの若者にも入会してもらい、同好会を立ち上げた。



尾上会長のあいさつ。若手にかける期待を熱く語った

2011年度には、新入会員の受け皿としてハイキングクラブも作った。「初心者を募集し教育するのは当会はじまって以来」（野沢理事）の出来事だった。

しかし、根本的な問題を抱えていた。それは、人材不足と資金不足である。尾上会長の肝いりで発足したものの動けるメンバーは少なく、ワンセットで何回転もせざるを得ないために担当者は休日をほとんど費やした。

交通費はおろか、山岳ガイドを導入したり登山用具をそろえたりする予算はわずかしくなく、雨天中止でほととずる状況もあった。加えて執行部は、財政逼迫、公益

2012年度YOUTH CLUB今後の予定 ◎山の基礎を学ぶ講習会（場所：日本山岳会）

日時	タイトル	内容
5/25(金) 19～21:00	夏山の登山用具と服装	登山靴、ザック、雨具、ジャケットや下着、非常食。夏山で使う登山用品を新しい情報を交えて紹介。山での正しい使い方を学びます。
6/29(金) 19～21:00	熱中症と病気、いざというときの対処法	熱中症になった、下痢になった、高山病になった。山でのアクシデントは得てして命取りになります。夏山でのいざというときの対処法を学びます。
7/4(木) 19:30～21:00	FULUBARI Table1	庭（FULBARI）のさらに先にある山を目指してみませんか。もしかすると、いままで見たことのない発見がそこにあるかもしれません。FULBARI Table第1回はテーブルを囲んでのお茶会です。
7/9(金) 19～21:00	夏山の天気と天気予報	平地と山の天気は違います。変化しやすい山の天気と空の観測の仕方。最新情報サービスを使った天気予報などを学びます。
7/11(火) 19～21:00	ストレッチでラクに登ろう	登山前のストレッチでケガ予防、登山後はクールダウンで疲れを減らします。
8/28(火) 19～21:00	カシミールの正しい使い方	カシミールを使った人なら、簡単に表現できる3Dの山の風景やGPSの記録に驚いたことでしょう。さらに面白い使い方を教えてもらいます。
9/7(金) 19～21:00	山の健康づくり体力づくり	山登りをしてココロもカラダも健康に。医師の立場から、正しい健康法、体力づくり方を語ってもらいます。
9/25(火) 19～21:00	山登りのパソコン、スマホ活用術	パソコン、スマホは山登りの新しいアイテム。アプリをしっかりと活用して安全登山を行ない、新しい楽しみを見つけましょう。
10/3(木) 19:30～21:00	FULUBARI Table2	FULBARI Table第2回はゲストを招いてのお茶会です。山と文化に思いを馳せながら、次の山（11/3-4）について紹介します。
10/19(金) 19～21:00	GPSナビを利用した山の歩き方	GPSを使って山登り。便利で簡単ですが、落とし穴もあります。しっかりと活用して安全登山を行いましょう。
10/26(金) 19～21:00	最新の登山用品と冬山装備	登山靴、ザック、雨具、ジャケットや下着、非常食。冬山で使う登山用品を新しい情報を交えて紹介。基礎的な使い方を学びます。
11/9(金) 19～21:00	冬山の天気と天気予報	冬の急激な天候の変化は遭難に発展しかねません。冬の山の天気と空の観測の仕方。最新情報サービスを使った天気予報などを学びます。
11/16(金) 19～21:00	冬山の登山用具の基礎知識	ワカン、スノーシュー、登山靴、アイゼン、ピッケルなどなど。冬山で使う登山用具の新情報を紹介し、正しい使い方を学びます。
11/30(金) 19～21:00	低体温症・凍傷とケガ、いざというときの対処法	足がつった、滑落した、凍傷になった。山でのアクシデントは得てして命取りになります。冬の山でのいざというときの対処法を学びます。
12/7(金) 19～21:00	地図の見方とGPS	2万5000分の1地図、山と高原地図、電子国土などの地図の読み方と利用の仕方。またコンパスやGPSの使う安全な登山方法を学びます。
1/18(金) 19～21:00	山の料理と行動食	山での食事は格別。絶品の山料理を紹介します。
1/25(金) 19～21:00	足腰を守ろう、鍛えよう	山に登るためには、足腰が丈夫なことが第一。日頃のトレーニングなどを紹介。
2/15(金) 19～21:00	ヤマレコの本当の使い方	山ヤの人気サイト「ヤマレコ」。使い方や読み方を学びます。
2/22(金) 19～21:00	春山の天気と天気予報	春山は気象の百貨店。難しい春山の天気を学びます。
3/22(金) 19～21:00	山の危険への対処法—道迷い、悪天、遭難	道迷い、天候悪化。山で遭難しそうになったときの対処法を学びます。
3/29(金) 19～21:00	山のスケッチ教室	山を描こう。山で描こう。楽しいスケッチ教室です。



横山さんによるフィッツロイ報告。会場で釘づけに

法人への移行や定款変更など多くの重要課題に直面。メンバーは築き上げてきたものの存続を危惧していた。

今年になってから、これらの課題のかんりの部分が解決された。ひとつは、JAC-YOUTHプロジェクトの活動も手伝って入会者増へと転じたこと。もうひとつは、プロジェクトチームを委員会に移行し、長期的活動が保証されることになったことである。さらには尾上会長の主導で、予算面でも2、3数年の活動を確保するために、1000万円の特別予算を計上することとなった。これについては、理事会および総会で、異議もなく

承認されたことであり、非常に心強いものとなった。

YOUTH CLUBが青年部委員会、学生部委員会、学生指導委員会を統括する組織となったのは、それぞれの委員会の活動内容が重複し、予算を切り分けていたのでは非効率なためである。しかしそれ以上に、運営するメンバーが同じだったという事情も大きい。

青年部委員会を開いてもJAC-YOUTHプロジェクトの会議を開いても、出席するのは同じメンバーというわけだ。互いに委員長と担当理事の立場を入れ替えながらの会議でしかなかった。それが改善された（しかし人材不足は相変わらずで、これからの問題として残る）。

■スキルアップを求める若者たちへ

YOUTH CLUBの目的は「若者および壮年に日本山岳会に入会してもらうこと」「若者を育てること」と明確になった。また予算がついた分、期待も大きくなった。

JAC-YOUTHで行なってきた雪山入門教室の拡大やプロガ

2012年度YOUTH CLUB今後の予定

◎ハイキング

日程	タイトル
5/26(土)	コンパスで地図を読む―新緑の三浦アルプス縦走 (初級読図山行)
6/9(土)～10(日)	笹ヶ峰を彩る植物観察とハイカー妙高高原の花をめぐる2日間
6/8(金)からも可能	
7/14(土)～16(月)	七時雨山荘から東北の山めぐり―東北の花と湿原をめぐる3日間
8/11(土)～12(日)	FULBARI trip to 上高地―山への一步を踏みだしましょう
8/18(土)～19(日)	谷川岳でキャンプの練習―湯松曾川でキャンプをしよう
9/15(土)～17(月)	はじめての夏山縦走―鳳凰三山、夜叉神峠から御座石温泉へ (予定)
10/28(日) (予定)	山でのいざというときの対処法―笹尾根でハイキングしながら学ぼう
11/3(土)～4(日)	FULBARI trip to 御岳山―山への一步を踏みだしましょう
11/17(土) (予定)	GPSやスマホを使った山登り―新しい技術で登る奥武蔵の山
12/22(土)～23(日) (予定)	宿坊に泊まりご来光を拝む山登り―七面山から黄金温泉へ
1/26(土)～27(日) (予定)	学習院大学の小屋に泊まってスノーハイカー日光・戦場ヶ原付近
2/16(土)～17(日) (予定)	地質と植生を読む伊豆半島―天城山を歩く
3/16(土)～17(日) (予定)	はじめての雪山―北八ヶ岳に登る

*年齢・性別制限もありますが、ぜひご参加ください。また、お知り合いの若い方々をお誘いください。

詳細は<http://www.jac.or.jp/info/iinkai/youthclub/list.html>

イド利用、装備の拡充などの計画を立てた。当初は、青年部のメンバーにスタッフやリーダーとして研修などを手伝ってもらう予定だったが、青年部はこれまで通り社会人山岳会のメンバーとして活動を充実。安全面を考慮して、山でのロープワークや雪上訓練といった実地訓練に参加できるのは入会后とした。

またこれまで通りロープワークや気象講習を机上で行ない、スキルアップを志向する若者に対して、ひとつのステップとなる機会を作った。

■新しい層の獲得へ

当会には山登りの専門家や同好者が集まっているが、山の文化に造詣が深い会員も多数在籍する。また同じ山登りでも8000メートル級の高峰登山から、岩登り、山岳スキー、ハイキングと多種多様である。富士山型の会ではなく、峰が織りなすアルプス型の会である。それぞれの興味や体力や仲間に合わせて楽しむことができる、それが当会の強みでもある。

しかしこれまで当会は、山に癒しを求めるような若者(山ガールなど)、あるいは仲間とノーマル

ートを楽しんでいる40〜50代の壮年に対しては何ら働きかけることにはなかった。

前者に対しては、ハイキングと基礎の講習会を用意した。初歩のスキルアップに加え、いろいろな山の楽しみ方を知ってもらう。さらには当会に関心を持ってもらうことにある。

講師は、専門的なスキルや知識を持った当会の会員にお願いしたが、外部にも依頼した。なるべく多くの要素を取り入れ、何度も足を運んでもらいたく計画した(別表参照)。なかでも白眉は、39歳以下の女性限定の企画だ。女性登山ガイドでもあるふたりの会員(恩



JAC-YOUTHの活動。野外救急法について学ぶ

田真砂美・柏澄子会員)に依頼したところ、出てきたのは、お茶会やヨガも取り入れながら、山を散策するという内容だ。これまででは考えられない企画である。

内容もやり方もいまは試行錯誤ではあるが、新しい山の感性や知識をもった人が多数入会してくれるといいと思う。また、仲間とノーマルルートを楽しんでいる40〜50代の壮年、さらには地方での若者の勧誘については、これから練っていく必要があるかと思う。

■次代の日本山岳会へ

もちろん企画を用意するだけでは人は集まらない。広報が必要になる。これまで登山技術の講習会は当会のホームページに掲載することで参加者を集めてきた。「それは競合相手が少ないから可能」(古野理事)だった。しかしハイキングや基礎講習は、スポーツ用品店やツアー会社なども実施しており、マーケティングや当会ならではの企画が必要になる。

広報活動としてSNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)を使うことにした。ハイキング企画や申込用紙を当会ホームページ



神奈川県葉山での読図講習会。人気の読図シリーズは、繰り返し開催される

に作り、SNSで参加を呼びかける。SNSのひとつであるフェイスブックは世界に8億人のユーザーを持ち、中東のジャスミン革命を誘導したことや、史上最大の市場で知られている。実名での登録になるため知人から知人へと情報が広がるインターネット上のシステムだ。また、青年部ではヤマレコ(<http://www.yamareco.com/>)というウェブサイトを活用してきた。ヤマレコとは、ユーザーが自らの山行記録をサイトに投稿し、その情報を相互に共有し合うというものだ。ほかの誰かが登った記録について、ウェブ上に公開されており、それを読むことによって

いろんな情報も得られるというメリットがある。

だがこれらの活動は、まだ始めたばかりであり協力者が少ないため、軌道に乗るのはこれからになる。しかし近い将来、会の運営はネット上がベースとなり、山の世界がグローバル化することは容易に想像がつく。いま在籍の若者、これから入会する若者たちが活躍する場が現れつつある。

困難はこれからだと思うが、未来に向けてのルートが、ここからは見える。

トピックス

今夏の海外登山計画ふたつの未踏峰へ

日本山岳会学生部のメンバーやほかの大学生を中心とした若い隊が、この夏ふたつの未踏峰を目指す。両隊とも、若手による冒険的海外クライミングをサポートする「The North Face Overseas Expedition Fund」を受けた。以下、2隊の隊長による登山の概要。

冒険的登山に憧れる

ザンスカールの未踏峰へ

大堀泰祐

今回のこの遠征は、冒険的登山というのを第一に考えた。対象はインド最北のジャムムーカシミール州のラダック地方ザンスカール山脈の一角、6165^{メートル}の未踏峰。チベット自治区に隣接するラダックには、チベット仏教が純粋な形で残っており、貴重な場所だ。そして未踏峰はもちろん、未踏の氷河も数多く残っている。決してメジャーではない山域の未踏峰に挑むことにこの遠征の特徴がある。

遠征経験豊富な隊員がいない上に、ザンスカール山脈はまだ登山隊の数がそれほど多くなく、情報量も少ない。準備や現地でのやりとり、氷河登山、すべてが未知のことであり、きつと苦労すると思う。しかし登山の原点ともいえる冒険が、そこにはある。

山を始めて以来海外遠征に憧れてきた学生たちが集まった。数多くの壁が立ちわだかるが、われわれはこの海外登山を通じて大きく成長し、笑顔で日本に戻ってきたい。

隊名Ⅱ2012年日本山岳会学生部ザンスカール遠征隊
隊員Ⅱ大堀泰祐(中央大山岳部23



ラダック地方の環境や暮らしを見る学術調査も行なう

歳)、飯田祐一郎(日本大山岳部22歳)、高山智之(三重大山岳部21歳)、三井健生(日本山岳会23歳)、久保田真平(法政大山岳部21歳)
日程Ⅱ8月15日～9月28日

ジャングルの彼方

カリマンタン島未踏石壁へ

小阪健一郎

去年インドネシアのスラウェシ島に沢登りに行ったときに、同行してくれた現地の大学生クライマーのアンディからカリマンタン島に1000^{メートル}級の未踏の大岩壁があると聞いた。写真を見て、ジャングルの向こうにそびえるその大岩壁のあまりの見栄えのよさに、僕は一目惚れした。岩壁の名は「バトウダヤ」で、英語にすると「パワーストーン」。名前もイケている。

僕はビッグウォールの経験がないが次の乾季までに準備をして、絶対に初登攀をいただいてやろうと決心した。アプローチ、パーミッションの情報が皆無のこの計画に、同年代の仲間4人がのつてくれた。大学でインドネシア語を専攻していたという、頼り甲斐あるメンバーもいる。



ジャングルの奥に位置するため、岩壁に取り付くまでも冒険

岩質は花崗岩でクラックが弱点になりうる。時間をかけてでもフリーで抜きたいと思っている。最悪の場合アメリカンエイドはしても、見苦しいボルトの連打だけは絶対にしたくない。世界に恥じぬクリーンなクライミングで初登攀を成し遂げたい。

隊名Ⅱ未踏の大岩壁バトウダヤ遠征隊
隊員Ⅱ小阪健一郎(京都府立医大山岳部23歳)、高柳傑(チーム△24歳)、大藪皓平(同志社大山岳部22歳)、大部長輔(東京外国語大WV部OB、山登魂24歳)、佐藤雄大(チーム△21歳)
日程Ⅱ8月下旬～1ヶ月間

編集室より

歴史と伝統に支えられた会報の「力」

『山』前編集人 神長幹雄

今年の1月号で会報『山』が800号を迎えた。1930年10月、日本山岳会創立25周年の記念の年に創刊号が発行されたことになる。かつて月刊の山岳雑誌の編集部にいたので、節目の記念号を何度か編集していたが、数十ページの特集を作るのに、ずいぶん苦労したことが思い起こされる。月刊誌で800号といえば、その歴史を振り返りながら、準備にずいぶん手間と時間をかけていたはずである。

しかし会報『山』は、やつと5ページの小さな特集ページしか作れなかった。成り立ちや内容を長年『山岳』の編集にあたっていた南川金一さんに、また生存されている先輩担当者の方たちに、その喜びや労苦を綴っていただいたに過ぎない。もっと違ったかたちで800号の姿を伝えることができたらと、反省しきりである。

2005年の723号から約7年にわたって『山』の編集を担当してきたが、バタバタと帳尻合わせで作ってきた感がぬぐえない。

こうした、ああしたいという思いは毎号あったが、そのどれほどのことができたのか……。日常の仕事に追われ、会報の編集にかけた時間は充分なものとはいえなかった。

1号の編集後記で浦松佐美太郎氏は、その発行の主旨を「毎月の会務並に会の情勢を会員に報告すること」と述べている。会員相互の情報交換の場になれたらと思つて、私も編集を担当してきた。

具体的には、最近の法人化問題や大震災、遭難事故など、話題性のある記事を巻頭にもつてくるようにした。一方で、会員の声も反映できるように「オピニオン」欄を設け、適宜掲載した。人物、歴史、書籍などの日本山岳会の財産でもある「文化」に関する記事も積極的に取り上げるようにした。バランスを重視しながら、それぞれの記事の分量、並べ方などにも配慮した。800号の特集号はともかく、私のなかではある程度やりとげたという思いも強い。

しかし、やり残したことも多い。支部の会員と直接交流をもちながら、支部会員の声を紙面に反映させたかったし、三水会や緑爽会、丹水会などの歴史ある同好会の紹介も頻繁にしたかった。後任の柏澄子さんにあとは託したいと思う。

50号ごとの切れ目である索引目録の編集にも感慨深いものがある。301号から733号までの索引を担当してこられた小倉厚さんの力添えがあつて作られてきたものだ。『末期性ガン』でもこれ以上はできません」という小倉さんからの電話には、応えようがなかった。その遺志を引き継いでくれた奈良千佐子さんのおかげで、800号までの索引目録も完成できた。通常号の編集もこなしてきたわけだから、その手間・労力は並大抵のものではなかったはずだ。こうして索引目録が完成すると、日本山岳会の動き、大きくいえば日本の登山界の動向までがわかるようでとても興味深かった。

平山善吉、宮下秀樹、尾上昇さんら三代の会長のもとで編集を担当してこられたのは、やはり幸運なことだった。つくづく歴史と伝統に裏づけられた「人」の力が感

じられたからだ。こうしてその歴史と伝統を継いでこられた日本山岳会に、最近若い大きな活力が導入されつつある。先輩諸氏の豊かな経験と、「実」の山で汗をかくことをいとわない山好きな若い人たちの力があれば、今後の日本山岳会も会報『山』も、大いに期待できる、といつては樂觀に過ぎるだろうか。

正直、やつと肩の荷が下りたような気がする。会員の方たちには感謝の気持ちでいっぱいである。ほんとうにありがとうございます。

編集室より

歴史と新しさの融合を試みを

『山』編集人 柏 澄子

中学1年生のときに、図書室で何気なく手に取った本『処女峰アンナプルナ』を読み、ヒマラヤってどんなところなんだろう？あの白い雲よりもっと高く聳え立っているのかなと夢を見るようになった。そして高校と大学の山岳部で登山を覚えた。日本山岳会に入会したのは、卒業後。大学時代の山の恩師である村井葵さんにお声がけいただいた。その後、中国登山協会と日本山岳会合同の女性チームに参加する機会もあった。

組織がもつ会報というのは、外部に宛てる役割としては、その組織の顔であり、内部的には会員たちが集う貴重な場だと考える。とくに全国的な会では、会員が一堂に会する機会は少ない。会員によつては会報が唯一の交流手段かもしれない。そのような媒体の編集長という重責について本心を言えば、私のような人生経験の浅い者が引き受けてよいのか、いまま思ひ悩んでいる。

日本山岳会が若返りをかけて、

YOUTH CLUBを発足させた。会報にも、若返りが求められている。近年の日本人アルパインクライマーの活躍は目覚ましく、世界が認める若者たちが何人もいる。彼らの登山や、若い人たちの関心を載せることだけでよいのだろうか。100余年の歴史をもつ山岳会の若返りは、そんな単純ではない。若い人たちは、登山のいまをリアルに知りたいのだ。それを発信できれば、若者たちにとつて魅力ある団体に映るだろう。しかしそれは、なにも目新しいものばかりではない。時代を問わず登山という行為が脈々と表現し続けてきた、普遍的価値だと考えている。若手クライマーの活躍を載せるだけでなく、日本山岳会の歴史のなかで、それぞれの会員たちがもちうる登山の世界を、この紙面を使って融合させ、相互理解を深めていけば、年齢も性別も、登山への取り組みもなにとつ垣根のない開かれた場を保ち続けられると考えている。

そんな場作りのとしての会報であれば、作り手にも喜びがある。個人的には日本各地の古くからの会員の方々にお会いして、話を聞く機会をもちたいと楽しみにしている。いろいろな人たちが融合できる場所でありたいのだ。

夢物語に過ぎないと思われるかもしれない。しかし先日、一緒に編集を担当する奈良千佐子さんと打ち合わせをするなかで、アイディアが浮かんだ。初の女性コンビによる編集部と言われているが、実のところ私には「女性らしい視点」というのがわからずにいた。すると彼女が、他者と他者をつなぐ穏やかな視点というようなことを話してくれた(と思う)。会の歴史と新しい財産である若さを繋げることができるかもしれない。

改めてお願いを申し上げます。会報は、会員の活動を伝えることが第一の任務だと考えています。皆さんからの原稿をお待ちしています(右下参照)。また忌憚ないご意見もお聞かせいただけませんでしょうか。皆さんのご意見やお便りが、支えとなり、次の号を作っていきたいと思えます。どうか、よろしくお願い申し上げます。

原稿送付に関するお願い

【スケジュール】

掲載ご希望の前月20日までに到着した分については、翌月号の掲載を検討します。20日以降については、翌々月号以降の掲載になることを、ご了承ください。

紙幅の都合により、先送りになる場合もありますが、この点もご理解願います。

募集記事など期限があるものは、早めにお送り願います。

【送付先】

テキスト原稿、写真、図表などすべて以下へお送り願います。送付先は、毎月『山』巻末に掲載します。

メール:jac-kaiho@jac.or.jp

郵便〒102-0081 千代田区四番町5-4

「日本山岳会 会報『山』編集委員会」宛

ご不明な点については、上記へお問い合わせください。

少人数が限られた時間で編集作業をしているため、どうかご理解、ご協力いただきたく、お願い申し上げます。

支部



だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

北海道支部
雪崩講習会

2007年11月23日の雪崩事故を契機に、北海道支部が雪崩講習会を実施してから4年になる。

重点事項として、雪崩講習会の会員への広がりをも1点目とし、独自で講習会の開催ができるようになるための講師養成を2点目にそえて進めてきた。

雪崩に遭わないための危険予知と回避する技術を全員が身につけることが最も重要との観点から、開催地も函館地区、札幌地区、帯広・北網地区の3地区に広げ、ほぼ全道地域を網羅した。今年度は1月に函館地区で、大沼公園の駒ヶ岳を眺めながら8名が受講。2月には札幌地区の藻岩山スキー場で24名が受講。帯広・北網地区では芽室町嵐山で日高山脈の峻峰をバックに10名が受講した。

3地区で開催したことにより、会員の受講が容易になった。技術を身につけることにより、どの地区の会員とパーティを組んでも同じ行動ができ、迷うことなくお互いの技術が分かり、現場で素早く役割分担し、効率よく対応することができて強い信頼感で結ばれることを図った。

雪質は湿雪、粉雪、ザラメ雪など3会場とも異なり、広大な北海道の雪山の特徴が出ておもしろい現象であった。私を含め5名の講師陣も日々研鑽に努め、他団体の雪崩講習会の講師を務めるなど充実してきているが、この度「NP O北海道雪崩研究会」主催の講師養成コースのカリキュラムを修了した3名が新たに誕生して、講師陣に一層の厚みが増した。

当支部は、雪崩事故の経験から独自の方針として冬山に入る会員へ雪崩講習会の受講を義務づけた。

現在進めているオホーツク分水嶺踏査や冬山登山、スキー同好会の行事などでは雪崩講習会の受講を確認し、未受講のものは参加できないシステムになっている。

雪崩講習会の内容は次のとおりである。雪崩回避の技術、セルフレスキューの技術（雪崩危険予知―雪崩回避―捜索―救出―救急―搬送）、机上講習会で理論、方法などを学習し、実地講習会でこれらの技術を取得していくことになる。講習会は、1泊2日の日程で開催している。

机上講習会では、雪崩発生メカニズム、弱層を形成する5種類の雪質、雪崩危険予知と行動判断各種テスト方法・観察方法、雪崩



ビーコン捜索訓練



スキージャンプテスト

3種の神器、セルフレスキューを行なった。

実地講習会では、ビーコンチェック、アクティブテスト・ピットテスト、テスト結果による危険予知と行動判断、ビーコン捜索、セルフレスキューを行なった。

雪崩講習会を受講し、せっかく技術を取得しても、1年過ぎれば忘れてしまうのが常だ。冬山に入るときもその場面で考えてから行動するのでは遅く、自然と体がそれに反応してこそ技術が身についたといえる。それには毎年雪崩講習会に参加し訓練してこそ技術を維持すること必要だと考え、毎年繰り返し受講する事を勧めている。

（芳村宗雄）

英文ジャーナル『Japanese Alpine News』第13号発行

中村 保

英文ジャーナル『Japanese Alpine News (JAN) vol. 13 2012』(B5判 132頁)を4月上旬に発行しました。編集内容と発行時期についてコメントします。

最近の海外との交流を通じて感じた欧米登山家が興味を惹くであろうと想定される記録と研究に軸足をおきました。その中でハイライトが、海外の登山界にとって情報が少なかったゆえに関心の高い巻頭の特集「東ヒマラヤ＝世界最高の未踏峰－禁断のガンカル・プンスム、難峰ナムチャバルワ、ギャラペリ三山」です。話題になるでしょう。ブルガリア隊のカラコラム・マッシャーブルム山群・6000m峰Big Walls Projectもアメリカの若手クライマーなどから脚光を浴び始めています。ネパールのアン・ツェリン・シェルパさんは西ネパールの未踏域開拓に熱心です。JACの参画に期待しています。

発行のタイミングについてはAAJ『アメリカン・アルパイン・ジャーナル』、AJ『アルパイン・ジャーナル』(英)、HJ『ヒマラヤン・ジャーナル』(インド)など海外のジャーナルより数カ月早く出すことのインパクトを狙いました。

目次は以下の通りです。カバーは東チベットの未踏峰6570m南面です。

購入希望の方は事務局まで。



2012年4月
B5判 132頁
定価 2000円(送料無料)

Japanese Alpine News

vol.13 2012 Contents

Feature Article

Highlights on the Eastern Himalaya	Tamotsu Nakamura	2
Gankar Punsum, Namcha Barwa, Gyala Peri massifs		

Climbs and Expeditions

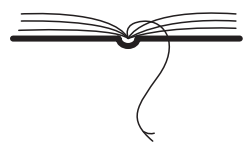
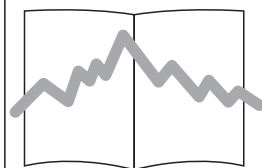
Anglo-Danish Expedition 2011 to Kyrgystan	Jakob Fisker	23
Bulgarian Khane Valley Expedition 2011-Pakisitan (Supplemented by Tsuneo Miyamori)	Michail Michailov	30
Koksil Valley-Ghujerab Mountains, Pakistan	Janusz Majer	48
Exploration 2011 of Hidden Virgin Peaks, Zanskar	Kimikazu Sakamoto	54
Two Peaks in the Headwaters of Karcha Nala	Kazuo Hoshi	65
New Routes & mystery in Thangsing Valley, Sikkim	Roger Payne	70
Autumn 2011 Expedition to Eastern Tibet	Tamotsu Nakamura	76
First Ascent of Yangmolong 6060m 2011, Sichuan	Tim Boelter	85
Grosvenor New Route 2011, Third Ascent	Jeff Shapio	90
Attempt 2011 in three Regions of West Sichuan	Takao Ohe	95

Study and Research

Mountaineering and Adventure in West Nepal	Ang Tshering Sherpa	102
Quest for Meconopsis in western Sichuan, China	Toshio Yoshida	107
Unclimbed Summits in Sichuan 2011	Tamotsu Nakamura	115
Book review (Pat Deavoll's book)	Datyabrata Dam	130

Cover photo : Jongpo Po Rong 6570m south face in the headwaters of Jiangpu Glacier, Yi'ong Tsangpo, Nyainqentanglha East (Tamotsu Nakamura)

図書紹介



『ひとり歩けば 辻まことア ンソロジー』

柴野邦彦・編



2011年12月
未知谷刊 192頁
未四六判 定価 2100円

オトカムこと辻まことが亡くなってから37年も経つ。辻まことの良き友人で後援者でもあった矢内原伊作、草野心平や串田孫一も亡くなったが、アンソロジーや画文集の復刻が内容やカタチを変えながら刊行され続けている。

本書を編集した柴野さんは生前の辻まことを知る数少ない人だ。若かった柴野さんは辻まこととスキー行をともし、山小屋で辻の語りを聞いたという。

辻の人生観やところをよく知る編者が選んだ20編あまりの辻ワールドは、紀行風、エッセイ風、あ

るいは聞き書き調など、自在に語られていて、舗装道路が山奥まで入り込み、モダンな山小屋に建て替えられる以前の山旅や山人の暮らしの世界に連れ戻してくれる。諸謹に満ちた文章からは、辻が山に分け入り、山人と交わりながら山や自然の懐に深入りしていく様子が伝わってくる。

「山の景観」は、少年時代の甲斐駒ヶ岳登山を土台に登山観を語り「健康が生む機嫌のよさ。この実感を生きようとする私にとって、山と孤独とはいつでも心をささえる大切な二要素だ」と結んでいる。また「わが未開の山」では、辻の形而上の山が語られる。「精神の健康法は、矢張り自然の中に自分を置いて、すべてを新しく確め、そこから出直すという体操だ」と。

カバー（油彩、荒野をひたすら進むスキーヤー姿）をはじめ、50点余りの挿絵は辻ワールドの味わ

いに欠かせない。本文中にカラー刷りが無いのが惜しまれるが、辻の絵画表現と技法は多種多様で、イラスト自体が物を語る雰囲気だ。ユーモラスな線画が散りばめられた秀山荘の広告や、最晩年まで続いた、やや時代がかったスタイルの登山者のさまざまな姿を描いた『岳人』表紙画と添えられた文章で辻まことを知った山屋は多いことだろう。その年代の山好きも70〜80代になる。

辻まことの山登りは、切り立つ岩壁や氷壁を攀じてはいない。ヒマラヤならぬウラヤマの自然や山里の人たちに深く浸透していき、文明批判を交えながら、自らを世俗から解放し、健康を謳歌した山登りの人だ。

本書と遭遇することでクライマーも昨今流行りの「アウトドア」派も含め、若くて新しい辻ファンが生まれること期待したい。

（松澤節夫）



『装丁山味』

装丁山味

小泉弘



2012年4月
山と溪谷社刊
A5判 160頁
定価 2520円

映画やオペラ（芝居も）は総合芸術といわれる。監督（演出家と俳優（役者）以外に、大道具・小道具・照明・音楽・衣装などいくつもの分野が総合されて仕上がる。本もまた同じ。著者だけで本ができあがるわけではない。ただ、本の場合は本体が圧倒的に重みを持つていて、何が書かれているのか、何が表現されているのか、それが最大最高の意味を持つ。

ところが、本は形を持つている。そこから別の問題が生まれる。本の大きさ（判型と言う。ついでに判はformatで、版はeditionまたはversionのことだから間違えないこと）、ページ数、文字の種類と大きさ、ページ内での1行の文字数と行数、余白のとり方、用紙、製版・印刷・製本等々。そして外回り、つまりジャケット（カバー）やケース（函）、表紙とか、こうしたことが総合されて本としての存在

小泉弘・著

が決まる。ここから装丁(装幀と書くこともある)、あるいはブックデザインという問題が生まれる。

判型や全体構成・組み体裁、つまり本の主体である本文関係は担当編集者が取り仕切ることが多いが、外回りは(写真集・画集などでは本体構成も)エディトリアル(またはグラフィック・)デザイナーが担当する。それが装丁である。

そして、本は表現されている内容とその本全体のつくりとが分裂しないで、調和がとれていなくてはならない。そうでないと、手に持っても読んでいても、違和感が生まれる。落ち着かない。そういう本は意外に多い。そこに装丁の持つ重い意味がある。

さらに、本文が主体という本の性格からすれば装丁は附属品だが、それは一方で作品として独立している。そういう二面性が装丁の面白さであり、むずかしさである。

よくできている、感じのいい本は、著者の宇宙と本のつくりとがモーツァルトの作品のように絶妙のハーモニーで溶け合っているものだ。この本(『そうていざんまい』と読む)では、そうした世界がどういふものなのか、それがみこ

とにわかる。小泉さんは一般書と別にして、山関係で500冊余を装丁したというが、本書は、その中から選び出した小泉弘作品集である。

小泉デザイナーの手によって、山の本が、汗臭くなく、瀟洒で気品があり、書店で見かけたらずぐに手にとって読みたくなる、そんなすばらしい世界に登りついていることが理解できるだろう。山の本の新しい分野を切り開いた好著。

(大森久雄)

『奥秩父山、谷、峠そして人』 山田哲哉・著



2011年11月 新出版局刊
東京六判 344頁
定価 1890円

著者は12歳のとき、大人に引率されるわけではなく自分たちだけで雲取山に登ったというのだから、山に關しての早熟ぶりに驚かされる。それから今に至るまで半世紀近くも続く登山歴のなかでもっとも足しげく通った山城がその雲取山を東の入口とする奥秩父だったという。

著者にとって思い入れの深いこの山城の回想録を2年にわたって『岳人』誌に連載したものがまとめられて本書になった。これだけの年数通えばさすがに半端ではない。著者の足跡は尾根や沢はもちろん、すでに廃道になった古い仕事道に至るまで、山地の隅々に及ぶ。今、著者ほど奥秩父の山と人に通曉した人はまずいないだろうと思われる。

私も奥秩父の山を好んで歩いてきたから、興味を持ってこの連載を読んでいたが、山岳雑誌の連載が終了後に単行本になることがめつくり少なくなつた現在、そんな意味でも貴重だと思つてさつそく購入した。文章はやはり本に納まつてこそきつちりと読める。

本書の帯には「奥秩父讃歌であり、奥秩父哀歌でもある」とあるが、通読して「哀歌」の印象が私には強かつた。登山者が長年親しんだ山を回顧するとき、その変化にたい嘆き節が出るのが通例で、執心が深いほど嘆きは切実さを増す。著者同様、私も奥秩父の変化に嘆息することも多い。

しかし一方で私は登山という遊びのことを考える。

登山は一見効率化に反する行為ととらえられがちだが、実は登山と効率化は昔から大の仲良しで、時代が新しくなるほどますます仲良しである。

人が快適で効率的に生きていくために自然を食いつぶすのは、タコが自分の足を食って生きるような矛盾だが、当然登山もそのなかに含まれる。

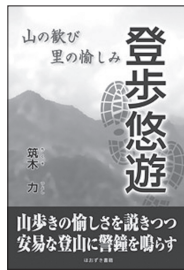
都会の真ん中に建つた、山より高いタワーを絶景だと賛嘆するのと同じ口で、山中の送電鉄塔を景観を壊すと非難する類のことは往々にしてある。私はそれを筋が

通らないと思う反面、現代に生きていくことは根本の部分で言行一致と相容れないことが多いから仕方がないとも思う。

しかし、人為による山の変化に對する嘆きは嘆きとして、自分も否応なしにそれに加担していることを明確にしておくなら、同じ「哀歌」でも、もつと深みを増すように思われる。
(長沢洋)

『登歩悠遊』

筑木力・著



2011年8月
ほおずき書籍刊
定価 273円
1575円

本書発刊時、著者・筑木力氏は86歳。新潟県山岳協会副会長、日本山岳会越後支部委員を歴任し、今もなお矍鑠として、半世紀以上に及ぶ長き年月、登山を続けている。

山岳関係の著書は、1964年の初刊『山とともに』以来、『わが出逢いの山々』、『山頂へのみち』、『山と自然と人間を愛して』、『山岳悠々』と続き、この度の『登歩悠遊』の刊行で6冊目になる。

現在、多くの越後岳人のなかで、これほどまでの文筆家をほかに私は知らない。筑木氏がこれまでに刊行された6冊の著書は、越後を主とした近隣各地に及ぶ登山紀行文だけでなく、その時代、その時節に直面している岳界を常に洞察し、問題点を取り上げ、かつそれに警鐘を鳴らし、ときにはその解決策も提起されるなどの論考も数多い。

本書は、「山岳に登る」「里山を歩く」「田舎に遊ぶ」「山・人・自然と付き合う」「山の本を語る」の5章69編からなる。紀行文については、かつての未踏峰や2000メートル級の山々の数は少なくなり、身近な越後の里山や山麓にも歩と眼差しを転じている。そこには、われわれが日ごろ何気なく見過ごしている山村の自然や風情や人情なども多く、それらを丹念に記してあつて心が癒され和む。

紀行文は、「そこに行くだけでなく、道中に何を感じ心に刻むかを大事にしたい」という著者の信念で描写されている。読者はその細やかな行動と情景に思わずその場に直面しているかのごとく錯覚に陥ってしまい、その山頂に至る

過程と雰囲気に取り込まれてしまう。

そこには山で長年培われた五感で得たいろいろな事象や行動が丹念に記述され、脈々と息づいているのである。

そして、山の研究と論考には、さすが元高校山岳部顧問教師らしい諸テーマが並ぶ。自然保護、登山マナー、安全登山、自己責任などなど。これらは登山の原点であるにもかかわらず、触れられることが少ない分野である。なぜなら、「語る者常に範を示さねばならない」からであろうか。その点、著者は長年の体験から青少年の指導育成と健全登山を志す、という独自の理念を確立し実践してきた。そして、多くの登山者から評価を受け、尊敬されている。だからこそ、的確なる指摘と提起をなすことができると思う。

本書は、筑木氏が山とともに歩んできたこれまでの人生の集大成に値するといっても過言ではない。ややもすると、マンネリ化しがちな多くの登山者の行動を原点に立たせてくれる。山旅紀行文の範となるべきこの1冊の一読をぜひお勧めしたい。
(山崎幸和)

『日本山岳文化学会登山史分科会・編 顕彰碑にみる人物登山史』

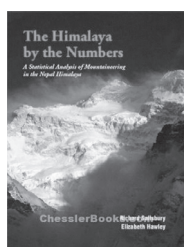


2011年10月
日本山岳文化学会刊
A5判 278頁
定価 2000円

本書は、史実が時系列に述べられた登山史ではなく、全国各地に散在する「顕彰碑」に刻まれた山と関わる人物を軸に、その業績を後世に継ぐという登山史の側面である。登場する人物は、著名な登山者のほか山にまつわる58人。

古くは8世紀、日光二荒山(男体山)を開山した勝道上人、江戸末期に槍ヶ岳開山で名を馳せた播隆上人、そして時代を超えて小島烏水、河口慧海ら、近年ではアルプス北壁三冠王といわれた長谷川恒男や8000メートルを駆け抜けた男・山田昇などの登山家。いっぽう新道開拓に尽力した谷川岳の高波吾策や中島喜代志。また文学・芸術面で啓蒙した作家や画家、さらに氣象観測の先駆者や植物学者らも掲載、このような各分野の人たちが紹介されている。

巻末には顕彰碑一覧表。185カ所、147名の人物が掲載され、



2011年
Vajra Publications刊
B5変型判 224頁
32.95\$
(ISBN:978-9937-506-64-9)

Richard Salisbury and
Elizabeth Hawley・著
『The Himalaya by the Numbers
— A Statistical Analysis of
Mountaineering in the Nepal
Himalaya』

貴重な資料として大変参考になる。いずれにせよ山や山麓など、また思わぬところでレリーフや像、また記念碑に出合ったら、確かめる気持ちを起こさせる一書である。

編集人を代表して西本武志さんは「本書をつうじて、登山史への興趣を高めてくださる登山愛好家がふえることを念じたい」と語る。

なお、本書は山岳文化叢書の7冊目。まとめたのは、日本山岳文化学会(日本学術会議協力学術研究団体)の登山史分科会が中心となり、42名が執筆している。ちなみに同学会は今年創立10周年を迎えた。会員には日本山岳会会員も少なくなく、本書の執筆者としても協力している。(羽田栄治)

エリザベス・ホーリー氏が1960年ネパールに着任以来収集した登山情報を、アメリカ山岳会が『The Himalayan Database』としてまとめ、2005年に発行した。その後も、収集した高所登山情報は毎年更新され、ウェブサイトで閲覧が可能だ。

このデータにもおさめられているネパール国内と国境界線上にある高峰へ出向いた7000隊、5万余人の登山情報をベースにし、登山家であり統計の専門家でもあるリチャード・セリスブリー氏が分析を試みたのが本書だ。一覧表と棒線、折れ線、分布曲線などを使ってグラフ化し、それぞれについて解説がある。

本書は4章と附表から成り立つ。また、登山期を3期間に区分している。すなわち、1950～1969年を遠征隊の時代とし、1970～89年を過渡期、1990～2009年を商業登山の時代とした。1章には登山活動について書かれている。1950年から2009年までの各年のネパール・ヒマラヤ全域での登山活動が網羅されている。とくに6000メートル、7000メートル、8000メートル峰、アマ・

ダブルム、チョ・オユー、エベレストについては、登山隊や登山者数をグラフ化してある。さらには地域、季節、年齢と性別、国別、遠征結果、個人記録などの一覧表とグラフが続く。

2章ではそれぞれの登山について分析している。6000メートル以上の高峰を500メートルごとに区切って登頂と登頂率をグラフ化した。続いて標高ごとのピークの登頂と登頂率、登山季節、年月日、登頂に要した時間、高齢者、性別、国別、ファイナルキャンプからの登頂率、平均的な登頂隊の遠征期間などの表とグラフがある。

3章は登山中の死亡者に関する分析だ。登山隊員と現地の人(スタッフやガイド、シェルパなど)について、この60年間に起きた死亡事故を500メートルごとに分類し、山の実態、現地の人の死亡率の高い山、登山季節、高山病、雪崩、滑落。体調不良などの原因、事故発生年、登山者の性別と年齢、国籍などや、大きな遭難事故について表にあらわしている。

4章は8000メートル峰登山における酸素ボンベの使用についてだ。登山隊員と現地の人の酸素ボンベ

使用の比較、酸素ボンベを使用しなかった人たちの死亡率などをグラフ化。これを見ると、近年、8000メートル峰でも登山隊員と現地の人ともども、無酸素の傾向が明白だ。附表にはネパール国内の6000メートル以上の300余りの高峰について、1山1行で8ページにわたる膨大なデータがある。

また、21箇所に挿入されたホーリー氏の記事が目を引き。日本山岳会による日中ネパール三国友好登山の紹介、ヒラリー卿のコメント、装備食糧を自分で担ぎ無酸素で他人の助けを一切借りずにエベレストに登頂した英人女性、エベレストで他人のテントに無断で寝泊りする登山者、マナスルで雷の一撃に倒れた仲間の目撃談、ナンパ・ラでの銃撃など登山現場を知る上で興味深いものばかりだ。

統計表などはとかく味気ないものと思われがちだが、眺めれば眺めるほど情報が引き出せ興味は尽きない。

高峰登山を計画するにあたり、入山季節、登頂工作期間、登頂日の決定などを示唆する情報の宝庫だ。ネパールの登山計画にはぜひ活かしてほしい。(南井英弘)

会務報告

理事会みなし決議の件（平成24年4月1日）

平成24年4月1日、理事会みなし決議議案（左記による）は、理事及び監事全員の同意があったので、理事会の決議とみなされる。（一般社団・財団法人法第96条及び定款第37条第2項の規定による）

記

1・理事及び監事の継続選任の確認（整備法第48条第1項のみなし規定による）

平成23年度末の理事及び監事とする。任期は、定款第30条第1項の規定により、平成25年度通常総会の時まで。

2・規程類の制定

資料のとおり。規程類は、一部を除き、別添、規程類管理規程別表のとおり。

3・支部規約の承認、（平成24年4月1日付、支部に関する規程第6条の規定による）

資料のとおり。

4・支部長の理事会承認及び会長任命（平成24年4月1日付、支部に関する規程第9条第2項の規定による）

資料のとおり。

5・評議員の会長推薦及び理事会選任（定款第33条の規定による）

平成23年度末における評議員と同じとする。任期は、定款第33条第5項の規定により、平成25年度通常総会の時まで。

6・秩父宮記念山岳賞審査委員会委員の理事会承認及び委員、委員長の会長委嘱（平成24年4月1日付、秩父宮記念山岳賞実施規程4、(3)及び(4)の規定による）

平成23年度末における委員及び委員長と同じとする。任期は、平成25年度通常総会の時まで。

7・海外登山助成金審査委員会委員の理事会承認及び会長委嘱（平成24年4月1日付 海外登山助成に

関する規程第3条の規定による）

平成23年度末における委員及び委員長と同じとする。任期は、平成25年度通常総会の時まで。

8・委員会委員長の確認及び会長委嘱（平成24年4月1日付、委員会規程第3条第1項の規定による）

平成23年度末における委員及び委員長と同じとする。任期は、平成25年度通常総会の時まで。

9・事務局職員及び山研管理人の雇用継続の確認（職員就業規程第6条第1項、日本山岳会上高地山岳研究所管理規程第2条第3項の規定による）

平成24年度第1回（4月度）理事会議事録

日時 平成24年4月11日19時より21時まで

場所 日本山岳会 集会室

【出席者】尾上会長、吉永・西村各

副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・

古野・川瀬各理事、平井・浜崎各監事

審議に先立ち尾上会長から以下のあいさつがあった。

公益社団法人として最初の理事会となる。組織は大きく変わらないが、評議員会が廃止されるなど、理事会の責任が大きくなった。また委員会組織にYOUTH CLUBが加わった。将来的に当会の中心ともなるべき部署だ。期待したい。維新元年として新たな気持ちで取り組んでもらいたい。

【審議事項】

1・YOUTH CLUB運営について（森）

担当理事は、森、野沢、中山、古野の各氏とし、委員長は野沢理事とする。表記はアルファベット大文字で「YOUTH CLUB」とする。（承認）

講習会、山行などHPで公開している。4月18日（水）19時より発足を予定している。

2・山岳6団体による環境大臣への尾瀬問題意見書提出について（森）

東電が尾瀬を売却する際には国有化を要望するもの。提出する旨の報告。（承認）

3・日中韓三国登山（於中国武漢）について（高原、野沢）

今年の当番国の中国から日時などの通知があった。今までの学生部指導委員会に代わりYOUTH

H C L U Bで対応する。ただし、今後はY O U T H C L U Bの自主性に委ねる。またこの企画の必要性も改めて考える。2年に1回開催なども視野におく。(承認)

4・国際山岳年プラス10について(高原)

拠出金は、他の山岳団体と歩調をあわせ10万円とする。(承認)

5・出版編集に係る業務委嘱について(高原)

別添に示すとおり業務委嘱を行なう。(承認)

6・山研管理人雇用通知書について(高原)

別添に示すとおりで雇用する。(承認)

7・「山の日」制定P Tリーダーの交代・委嘱について(西村)

5月9日より成川隆顕会員から萩原浩司理事に交代・委嘱する。(承認)

8・埼玉支部の支部長交代(高原)

石橋正美会員から大久保春美会員に交代する。(承認)

9・入会の申し込み(高原)

(承認)

10・国土地理院から「電子国土賞」の推薦団体依頼について(高原)

優れたG I S (地理情報システム) 利用のコンテンツやソフトウェアに賞を与えるもの。(承認)

【報告事項】

1・各P T報告

1 法人運営適正化P T(吉永)

コンプライアンスとガバナンスの徹底のために活動する。

「平成24年4月1日、理事会みなし決議案」は、理事及び監事全員の同意があったので、理事会の決議とした旨の報告があった(会報5月号に掲載予定)。

2 山の日制定P T(西村)

「動物編」リーフレット完成。活用をお願いしたい。

10月、山岳5団体で、「山の日」関連団体を集めた会議を開催する。

3 ルーム検討P T(森)

若者が集まれる場所や資料・図書の保管などのために物件を探す

4 収益事業・会員サービス事業検討P T(節田)

出版事業、ツアー事業、登山教室、保険事業、グッズの新商品開発、山小屋との連携などを考えている。次回、メンバーや事業を発表する。

5 支部活性化P T(高原)

当会支部主催で、会員外の参加に対する傷害保険の検討。その他、首都圏支部として神奈川支部の可能性の検討をしている。

2・平成23年度決算状況について(小林)

資料による説明があった。収支は昨年度と比べ改善してきた。

3・臨時・拡大常務理事会開催(3月29日)について(西村)

出版関連3委員会、図書関連委員会の担当理事を交えて話し合う。改善策を探っている。

4・福島支部創立65周年記念日本・パキスタン合同カラコルム登山計画について(高原)

7月9日～8月3日。シムシャール地方の未踏峰(6000メートル級)が目標。

5・学生部のインド・ザンスカール未踏峰P T 6165メートル遠征計画について(古野)

8月15日～9月28日、学生5名による登山の実施。

6・入会申込書について(永田)

A4サイズにし、パソコンから出力できるようにした。

7・支部所属届、所属支部変更届について(高原)

届出書の周知があった。

8・J A N (ジャパニーズアルパインニュース) 13号発行(節田)

4月上旬発行。東ヒマラヤの世界最高の未踏峰についての情報等。

9・大町山岳博物館友の会より、「山岳」記事転載許可(高原)

10・松本市波田郵便局からの切手使用ウエストンレリーフ写真利用許可(高原)

11・谷川岳危険地区の登山禁止について(群馬県知事)(高原)

12・会報編集の報告(神長、柏)

4月号は総会の議案中心。会報「目録」を4月号に同梱。

13・国立登山研修所の研修計画を紹介(高原)

日本山岳会団体傷害保険 加入のおすすめ

加入対象者(被保険者): 日本山岳会会員の皆様
会員の方がご加入の場合、配偶者、お子様、ご両親、ご兄弟、会員ご本人の同居の親族及び同居の使用人の方も同時に加入いただけます。

中途加入可能です。まずは、資料請求下さい!

海外登山の保険、その他損害保険・生命保険全般で相談も承ります。

東京海上日動火災グループ代理店 株式会社東海日動パートナーズ東東京
団体傷害保険資料請求担当: 藤田 Mail:a.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp
TEL.0120-161-808 FAX.0120-161-809

14・日本山岳ガイド協会「安全のための知識と技術」講演会案内（高原）
15・信州大学学士山岳会オーガ登山隊の登山中止（萩原）

海外登山助成金の対象であった同隊が登山中止になり助成を辞退してきた。（前期の対象グループはなし）。

16・会報「山」の新編集長の柏澄子会員の紹介があった。（高原）

17・臨時職員の藤川志津子さん（6月1日採用予定）の紹介があった。（高原）

【今後の予定】

1・文科省へ平成24年度事業計画予算及び移行登記完了届出書提出（4月17日）

2・内閣府へ移行登記完了届出書提出（4月17日）

3・常務理事会（4月26日）、理事会（5月9日）、監事監査（5月7日）、総会・支部長会議（6月16日）

4・支部事務局担当者会議（7月28日（土）11時～16時）

5・第1回四国支部総会（4月29日）会長出席予定

ルーム日誌

4月

25日	24日	23日	21日	19日	18日	17日	16日	13日	12日	11日	10日	9日	5日	4日	3日	2日	
みちのり山の会	自然保護委員会 海外委員会	インターネット小委員会	森づくりの会	活性化PT	つくも会 三水会	キークラブ	図書管理委員会 00会 ス	休山会 新法人移行PT 総務委員会 資料映像委員 会 高尾の森づくりの会	地理クラブ YOUTH CLUB	フォトビデオクラブ 山岳	理事会 山想倶楽部	山研運営委員会 九五会	スケッチクラブ	高尾の森づくりの会 スキ	常務理事会 学生部	自然保護委員会 集会委員 会	スケッチクラブ 総務委員会

26日 会報委員会 常務理事会
山遊会 山の日制定PT
27日 自然保護委員会 YOUTH
H CLUB
4月来室者454名

会員異動(4月)

物故

小峰顕一(4649) 12・3・20
二塚謙三(5661) 12・4・20
五島保夫(12777) 12・4・22
退会

中谷實悦郎(10040) 宮城
中嶋英彦(10280) 北海道
吉田一三(10451) 北九州
佐藤妙子(12708) 宮崎
橋口節子(13821) 宮崎
鈴木泰宏(14224) 宮崎
平松 携(14233) 広島
矢野 均(14278) 宮崎

◆国際山岳年+10シンポジウム 6月23、24日参加のご案内

日大文理学部キャンパス(東京・世田谷区桜上水)での開催です(会報4月号既報)。入場無料。予約申込み不要。事前に席の確保を希望の方は成川まで。

(FAX) 03-3488-11580

yamanohi-info@jac.or.jp

支部への所属及び移動の手続き

会員が支部に所属する時(入会時、支部に所属した人は除く)及び所属支部を変更する時は、所定の書式により届け出て下さい。

(会報『山』803(4月)号11ページの様式1、2を参照ください)

24年度通常総会のお知らせ

6月16日(土) 14時開催。

出欠席ハガキに出欠席・委任をお書きの上、必ず返信ください。

新定款によ

り、総会成立には、2分の1以上の出席者数が必要です(旧定款では3分の1以上でした)。前回の23年度第2回通常総会の出席者数は、54・3割で、かろうじて過半数を超えました。

5月下旬に案内状等を配布いたしますので、「要返信」にご協力をお願い申し上げます。

なお、今年度から通常総会は年1回の開催となります。

(総務委員会)

図書受入報告(2012年3月～4月)

著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
澤田眞(編)	「アルプ」執筆者名索引	79p/26cm	澤田眞(私家版)	2012	編者寄贈
澤田眞(編)	「アルプ」執筆者名索引	79p/26cm	澤田眞(私家版)	2012	大谷一良氏寄贈
木崎甲子郎	辺境の風景——木崎甲子郎画集	74p/22cm	出版舎Mugen	2011	著者寄贈
伴明・山田裕敏(編)	雪線——大阪市立大学山岳会創立90年抄史	423p/26cm	大阪市立大学山岳会	2012	発行者寄贈
高澤光雄	愉しき山旅	206p/20cm	北海道出版企画センター	2012	著者寄贈
手塚宗求	諸国名峰恋慕——39座の愛しき山々	248p/18cm	山と溪谷社	2012	出版社寄贈
小泉弘	装丁山味	154p/21cm	山と溪谷社	2012	出版社寄贈
S.ハウス(著) 海津正彦(訳)	垂壁のかなたへ	390p/19cm	白水社	2012	出版社寄贈
真栄隆昭	深田久弥 その人と足跡	78p/21cm	真栄隆昭(私家版)	2012	著者寄贈
真栄隆昭	深田久弥のふるさと 江沼の山々	58p/29cm	真栄隆昭(私家版)	2011	著者寄贈
坂本勇 他	関東周辺 やまなみ歩き	348p/21cm	新ハイキング社	2012	出版社寄贈

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆第28回全国支部懇談会のお知らせ

千葉支部

全国支部懇談会が千葉の九十九里で開かれます。公益社団法人に移行して初めての全国支部懇談会です。山のない千葉というイメージをもたれている方も多いと思いますが、千葉は東京に隣接して交通の便もよく、のどかな自然も沢山残されており、海の魚・山の幸など美味しい食べ物が沢山あります。そんな千葉の里山、里海を歩いてみませんか？

期日 10月20日(土)～21日(日)

会場 国民宿舎サンライズ九十九里

日程 20日 受付 12時から、14時半から講演会、郷土芸能、18時から懇親会

・21日ハイキング①九十九里浜散策(10キ)コース②笠森観音ハイキング(5キ)コース

費用 1万7000円(宿泊・懇

親会・ハイキング)
定員 300名(先着順)

締切 7月31日厳守

申込 支部一括の場合は、各支部担当者に連絡し申し込む。

・個人の場合は、ハガキかFAX、メールで申し込む。

※申し込みには、支部名、参加するハイキングコース、交通手段

(バス、車)も明示のこと。

※東京駅から直通バスを利用される場合バスの座席数もあり増便

します。必ず往復、片道(行き、帰りのみ)と記載する。

申込・問合 千葉支部全国支部懇談会事務局 豊倉さと子

(〒278-0031 野田市中29
TEL & FAX 047-122-9041
ig210121-2712@tp.t-com.ne.jp)

◆探索山行のご案内

今年は、昨年に日本ジオパーク
科学委員会

認定された磐梯山を訪ねます。解説は佐藤公氏(磐梯山噴火記念館副館長)、講師は江花俊和(福島支部)です。

23日昼食は各自持参のこと、24日の昼食は用意します。

日時 6月23日(土)～24日(日)
日程 23日7時池袋駅西口芸術

広場集合 チャーターバス乗車・磐梯山噴火記念館・銅沼・国民休暇村裏

磐梯着
・24日7時45分宿出発・猫

魔八方台登山口・磐梯山山頂・15時翁島登山口よりバスで帰京

費用 約2万円(往復交通費、宿泊、弁当代、講師謝礼等)

申込 ハガキ、FAX、メールで
山田誠(〒152-0023 目黒区

八雲2-25-17
FAX 03-3723-2171

yakumoyamada@td01tscom.net)

■訂正とお詫び

目録(自751号～至800号)、20頁、短歌・俳句の2行目「広瀬敬雄」は「広渡敬雄」の誤りでした。訂正して、お詫びします。

◆編集後記◆

●YOUTH CLUB発足式で、大学生たちによる未踏峰遠征チームに会いました。未知のものへ真っ直ぐと向かっていく眼差しから、清々しさを感じました。

●貴重な会報の2ページをいただき、新旧編集長の挨拶を掲載させてもらいました。改めて責任の重さを実感しています。会員の皆さんからの寄稿(支部、委員会の活動、そのほかすべて)について、7頁にお願いを掲載しました。多くの原稿、ご意見をお待ちしています。

●GWはこの時期特有の判断が難しい天候であり、各地で遭難事故もありました。今後とも季節の移り目が続きますが、好天をつかんで、安全で実りある登山をなさってください。(柏澄子)

日本山岳会会報 山 804号

2012年(平成24年)5月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上 昇
編集人 柏 澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社